

6. パーキンソン病における転倒・転落の発生状況の実態

○山下哲平（関西福祉大学大学院看護学研究科修士課程）
倉田節子，前川泰子（関西福祉大学大学院看護学研究科）

I. はじめに

パーキンソン病（以下 PD と略す）は、10 歳代～80 歳代まで幅広く発症するが、中年以降の発症が多く、高齢になるほど発症率および有病率は増加するといわれている。わが国内においても PD は経年的に増え続け、高齢の PD 患者が増加し、疾患の特徴も併せて、転倒・転落（以下転倒と略す）が高い疾患であるため、その予防は急務となっている。よって、本研究は、PD 患者における転倒の発生状況の実態について、文献から明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. データ収集方法

医学中央雑誌 web 版（1985 年から 2013 年まで）を用いて、「転倒 or 転落」「パーキンソン or parkinson」を検索語句として得られた文献 435 件のうち、研究テーマに沿った内容の文献 4 件について分析した。

2. 分析方法

435 件の文献を年次推移で分類し、対象となった 4 件の文献から転倒の発生状況について記述のある部分を抽出し、入院と在宅とに分け、発生場所、発生時間、転倒につながった行動、転倒方向の項目に従って分類した。

III. 結果

得られた文献 435 件を年次推移で見ると 1991～1995 年は 9 件、1996 年～2000 年は 23 件、2001 年～2005 年は 110 件、2006 年～2010 年は 180 件、2011～2013 年は 113 件であった。原著論文は 201 件であり、その中で、転倒の発生状況に関する文献は 4 件、そのうち 3 件が同調査結果からの報告であった。PD 患者の転倒発生状況としては、転倒場所について入院では「病室」が多く、外来（在宅）では「居間」が多く、次いで「寝室」と「廊下」であった。発生時間としては、入院、外来（在宅）ともに夜間より日中が多かった。転倒につながった行動や各活動における転倒率については、入院では「排泄」「物をとる」が多く、外来（在宅）では「歩行」「起立」「更衣」など多彩な傾向にあった。転倒方向については、入院中は後方に多く、外来（在宅）では、前方と後方ともに同程度であった。

IV. 結論

年次推移で見ると PD の転倒に関する関心が高まっており、さまざまな視点で研究がなされてきている。しかしながら、実態や発生状況の調査研究が圧倒的に少ない。国民性や地域性、各病院・施設の違いなどを考慮すると、今後追従調査の必要性があると考えられる。